

〈随想〉中国の青年たちと読んだ日本の小説

下沢, 勝井

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

36

(開始ページ / Start Page)

174

(終了ページ / End Page)

176

(発行年 / Year)

1987-03-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019505>

中国の青年たちと読んだ日本の小説

下 沢 勝 井

病臥している初老の男が、額のしわで蠅を捕えさわぐ尾崎一雄の掌編「虫のいろいろ」がある。又、志賀直哉の「城の崎にて」では、蜂やねずみやいもりやらの小動物の死や、死に至る動騷を見つめることを通して、人間の生と死の問題を考えようとしている作品がある。

これらは日本近代文学の中でのすぐれた心境小説として、評価の定まった作品とみてほぼさしつかえなからう。

中国の若い知性たちも、こうした日本人的感觉を通して描かれた日本語の表現に関心をもち、興味をいだくようである。彼等は「どこまで理解できたかは疑問ですがおもしろい見方です」などという。しかしそういった感想のすぐ後で、「なぜはえのようなきたない生きものをとりあげたのでしょうか」「人間とはかげはなれた昆虫や小動物を通して人生を考えるのはおかしくありませんか」などと聞き返してくる。そして又「これもやはり小説でしょうか」といったとまどいも見せる。

外国語を通して、その国の生活者たちのものの見方や感じ方を体

験してみるといったこうした準体験（文学的体験）には、その前にその国の歴史や風土や習慣の違いを理解しておくことは大切であろう。そしてそうした理解をてこにして、作品の中で使われていくひとつひとつのことばが内包していく微妙な関係——いってみればこうした作家たちを育ててきたその民族のことばの生理に、文学的想像力を駆使してどこまで近接することができるかはなかなか興味深い問題となる。特にこうしたすぐれて日本的ともいえる発想をもった作品が、どこまで外国の若い読者の理解や心情に迫ることができるかは、考えてみると興味深い。

しかしきょう私がここで問題にしたいのは、それ以前の、現在の彼等の国情における小説の読まれ方というか、文芸科学のあり方（それを文学教育の可能性といいなおしてみてもいいと思うが）そこを問題としてみたい。というのは、例えば「虫のいろいろ」ならそれを「城の崎にて」ならそれを学習者が互いに読みあって感想を交換するといった、そういった作品の読み方には中国の青年たちは慣れてはいない。むしろ彼等の眼はへあなたが日本人で日本から来た教

師であるならば、中国人の私たちに感想を求めるより前に、なぜあなたの見解なり解釈なりを私たちの前に提示してみせないのですか」といった不服そうな表情を見せる。又感想を求めても、「作品以外に解説書のひとつも見えていないのですから、発言のしようがありません」ともいう。つまり彼等にとっては学習者相互の意見交換は学習ではなく指導書なしの見解は見解にはなり得ないと決めてしまっているようにみえる。

中国では多くの場合、現代の中国文学を大学教育の講座の中に位置づけて研究するといった機会は極めて少ない。「中国文学」という場合、それはそれぞれの時代の古典を指している場合が多い。

小説を、特に現近代の小説を、文芸科学の対象としてとりあげるといった習慣にも又彼等は慣れていない。又純文学とか中間小説とか大衆読みものといった、いわゆる日本的区分が通用するような状態とも又異なる。しかし個人の読書生活の中で自国の現代の小説を読むという習慣は、日本の学生たちよりもむしろ多い。そしてそうした読書体験は、一応教室とは別のところにあるといった方がいいのかも知れない。教室で学習すべきものは歴史的な詩文ではあっても現代の小説ではない。

中国語で「文芸」とか「文芸活動」「文芸作品」というのは、どうやらそれは日本語の解釈とは異なり、むしろ文と芸との間に、を入れた、文化・芸術活動の総体をさし、作品も又絵画・彫刻・音楽・舞踊・映画などすべての文化・芸術現象の総体を指してそう呼ばれているらしい。

又一方小説ということばも、文学というよりも稗史（小説家流蓋出於稗官―街談巷語道聽塗説者之所造也―漢書）の考えが、

今も尾を引いていないとはいえないようにみえる。

小説に対して〈大説〉といったことばが日本にもないように、中国にも又あるわけではないが、しかし彼等の中には小説に対比するべきなにか、それを先の稗史に対する正史、小説に対する詩文といっているのかもしれないが、そうした対置で日本の作家の作品も読まれようとしているのかもしれない。「志賀直哉や尾崎一雄という作家は、この小説の前には一体どのようなものを書いていた人たちだったのでしようか」といった真顔での問いが、その間の彼等のすなおな疑問のありかを教えてくれているように思う。

日本の私小説の伝統が、時代の状況や動向から意識的に背を向け、名譽ある孤立を選びとることを通じて、限られた中で自立と醇化を守り抜き、そこに少数者にのみ通じ合えるたしか人間存在の所在証明をはたしてきたことは、私などがここで改めて力説しなくともよいことであろう。そして中国の若い読者たちも、時代や国をへだてたところに居るからといって、決して通い合えない場所に住みあっているとは私は思っていない。問題はむしろある部分で彼等も今は、大変近いところにいる。彼等にあつての体制と個の問題、あるいは集団と個人の関係は深刻である。若い彼等の古い頑迷なる部分への不服従の運動は、さまざまな対応を選ばせ、痛ましい努力を続けさせている。政治と文学の関係、あるいは文学にとっての近代といわれるべきものは、こうした無援の孤立と孤愁を、それぞれがそれぞれのし方の中で体験しあうことを通じて発見しあえる認識なのかもしれない。

しかし又それにしても、民衆と文芸運動の関係——それをそれぞれの国と時代における文学者の条件といたおしても私にはさしつ

かえないのだが——中国と日本の文学活動の社会的意味や意義は、その距離が大きすぎる。たとえば彼等の国の場合、憤死した屈原のひそみにまでさかのぼらなくとも、私たちには魯迅や田漢や巴金の生き方の中に、日本とは異質のそれをみる。革命前もそうであるように、革命後も時代の変動への露頭は、まずいゆるる文芸活動家への指標やあるいは指弾を前触れとして、それに続いて変革や変更が行なわれてきた。こうして時代の幸運も不幸も、文学者の、特に指導的文学者の高揚や憂患と別にはなかった。国の命運と文学者の運命は、中国の場合は今もきわだつた緊張関係の中にある。もちろん中国の文学活動がそうした面だけではないが、たとえば先の病臥する初老の男の額で泡を食うはえを、眼をつりあげて見上げている男や、暮れなずむ初秋の清流の中で、一瞬尾をつりあげて、体を沈ませるいもりを見ている中年の男とは、異なる世界の住人のように思われる。

「歴史は変革さるべきものとして、自然は征服されるべきものとして彼等の前には存在していた。」とは、ヨーロッパの近代史を学習する場面で、若い歴史の教師から教えられた、今も私が記憶している寸言だが、私には、わずか二年間の体験にすぎなかったが、中国の人たちと生活してみても、このことばは同時に中国大陸の歴史と風土の上でも、そのままあてはめられることばであると感じさせられてきた。

日本と中国が同文同種とか、一衣帯水の間などと修飾されたとしても、両国の歴史と環境とは根源的に異なる。たとえば、一軒の家を建てる場合に、まずその家を囲う塀から造り出すといった習慣は日本ではあまり考えられないが、中国の場合は家内に二重三重の扉

をつけて、その外に重い煉瓦塀を通行人の背丈以上の高さにはりめぐらすといった習慣が今も守られている。三百年を耐えてきた清朝の歴史が、北京城内の先住の漢民族を、すべて城壁外に移住させ、その後同族の満州族を計画的に入居させて都づくりをはたし、王城内にはひとにぎりの土も残さず、石と煉瓦で壮大な城郭を築きあげたような思想は、日本のどのような都遷りのときにもなかった。重畳たる山頂をつなげて、万里の長城を築きあげようとするような発想も日本人のものではない。ともかく日本では長城の代りに、すでに大陸とをへだてる海があつて、天与の海が異民族からの襲来を防ぎ、すくなくとも隣国の朝鮮半島に住む民族が歴史的に味わわされてきたような辛苦は、われわれの歴史の中にはない。はっきりとした季節感を持ち、温暖で湿潤なこれも天与の自然に恵まれ、同質の言語圏に住む同族が圧倒的に多いこの列島の民族が培ってきたものと、ユーラシア大陸東部の、広大ではあるがきびしい風土と荒野の中で培われてきた多民族国家からなる文化や習慣も当然に異なる。

中国の若い読者たちと、日本の小説を読みあうことを通して発見させられてきたことは、私には全く当然な結論である、中国も又外国であり、外国人であったという実感を通しての確認にすぎなかった。しかしこの確認を私はこれからも大切にしていきたい。そしてここでの二年間は、私は日本の文学を読むというよりは、むしろじかに生活者としての感想を語り合うといった対し方をしてきた。その方が私には刺激的で楽しかったからである。

(付記) 一九八四年三月～一九八六年七月まで、私は中国南部の広州の中山大学と同大学外国語学部で日本人教師として働きま